「地域経済研究」第17号、2006

（資料）

広島市の住宅団地における街区公園の利用形態に関する実証的分析

――住宅団地内公園の周辺住民の年齢構成に着目して――

広島大学大学院社会科学研究科マネジメント専攻博士課程後期　塩　出　興　二

要　旨

街区公園の利用形態は公園毎に異なっている。それは、公園周辺の年齢構成が異なるためと考えられる。そこで、広島市内の住宅団地の街区公園に着目し、街区公園周辺の年齢構成とその公園の利用状況についての関連性を実証的に検証を行った。

住宅団地内の街区公園においては、今回の資料での検証では、公園周辺の年齢構成と公園利用人口の年齢構成との関係が少ないことが明確となった。そして、それらの公園周辺に存在する老人クラブ等による個別のコミュニティの利用パターンによる活動の結果が、公園利用形態の違いに結びついていることも判明した。

また、広島市における住宅団地内の街区公園の利用者は少ないことが明確になったため、その理由について考察を行った。

キーワード：年齢構成、住宅団地内街区公園、公園利用形態

はじめに

街区公園の利用状況は公園毎に異なっている。それは、公園周辺に住む住民の年齢構成が異なることが、利用状況に影響を与えているものと考えられる。そこで、本論では、街区公園周辺住民の年齢構成とその公園の利用状況についての関連性を実証的に検証することを目的とする。

周辺の住民が公園を利用する範囲を、都市公園法では誘致距離としている。その誘致距離は街区公園では 250 m を標準距離と定められており[1)]、その誘致距離内に住む住民の年齢構成が公園の利用状況に影響を与えると考えられる。

住宅団地は、完成の時期が明確であり、完成後短期間に同世代の人々が一挙に入居し、持ち家が多く転居による移動が少ないため、年齢構成に特徴が現れると考えられる。また、住宅団地には事業所が非常に少なく、昼間人口の流入がほとんど無いため、公園利用が公園周辺住民に限定されると考えられる。

そのため、まず住宅団地内の街区公園に着目し、住宅団地の街区公園周辺の年齢構成とその公園の利用形態との関連性を研究する。以降の文中において、住宅団地内公園は、街区公園を表わしている。

1．住宅団地内の公園の利用状況

2001年に広島市が実施した公園利用実態調査[2)]は、広島市内の街区公園31箇所の利用実態を、2001年11月８日（木）と、11月11日（日）の午前６時より午後８時までの14時間の、性別、年齢層別、

1）都市公園法　都市公園法施行令　平成15年３月改正以前の数値

2）平成13年度「公園利用実態調査の結果について　報告書」広島市緑化推進部　2002.5

利用施設及び利用目的、利用時間帯及び在園時間の実態を一斉に調査したものである。

その調査資料に含まれる住宅団地内公園は、東区牛田早稲田第二公園、東区大和台第四公園、南区仁保第一公園、安佐南区緑が丘北第一公園、安佐北区落合南第四公園、安芸区平原第二公園、佐伯区美鈴が丘緑第一公園の7箇所である。

団地内公園のある団地の特徴

表1に団地内公園のある団地の特徴の一覧表を示す。

表1　団地内公園のある団地の特徴

公園名	団地名	団地完成年	公園面積(ha)	一戸建世帯割合(%)	持ち家世帯割合(%)
牛田早稲田第二公園	東区牛田早稲田団地	1978	0.19	24.2	70.2
大和台第四公園	東区大和台団地	1979	0.06	98.9	97.7
仁保第一公園	南区仁保団地	1974	0.13	65.2	58.3
緑が丘北第一公園	安佐南区サンハイツ緑が丘	1975	0.19	35.5	34.5
落合南第四公園	安佐北区ハイライフ高陽	1983	0.23	89.7	89.0
平原第二公園	安芸区平原団地	1970	0.15	82.9	79.7
美鈴が丘緑第一公園	佐伯区美鈴が丘団地2期	1986	0.10	98.9	92.1

牛田早稲田第二公園（1983.12.7 供用開始）は、市街地に近く、一戸建て世帯数割合が24.2%と低いが、高層化マンションが多く存在する、東区牛田早稲田団地の中に在る。なお、小学校は住宅団地の最も奥で最も高い場所に在り、当公園より約600 m 離れている。中学校、高等学校は住宅団地内には存在しない。当団地には7箇所の公園が点在している。

大和台第四公園（1988.3.31 供用開始）は、殆どの世帯が一戸建ての持ち家住宅の、郊外型住宅団地である東区大和台団地の中に在る。なお、住宅団地内に小学校、中学校は存在しない。小学校、中学校までは、約1,400 m 離れている。また、当団地には4箇所の公園が点在している。

仁保第一公園（1986.3.31 供用開始）は、市街地に近く、持ち家世帯割合が58.3%、1人世帯割合が24.7%で、若い世代が多く住む南区仁保団地の中に在る。なお、住宅団地内に小学校、中学校は存在しない。小学校までは、約700 m 離れている。また、当団地には他の公園が存在しないが、隣接の団地の公園3箇所とは約250 m の距離である。

緑が丘北第一公園（1988.12.12 供用開始）は、都市近郊に在り、持ち家世帯割合が34.5%で、その他を県営アパートが占めている安佐南区サンハイツ緑が丘団地の中に在る。なお、当公園は小学校に隣接している。また、当団地には多数の公園が在り、近隣には6箇所の公園が点在している。

落合南第四公園（1987.3.31 供用開始）は、都市近郊に在り、殆どの世帯が一戸建ての持ち家住宅で、親子2世代の同居が明確に示されている安佐北区ハイライフ高陽団地の中に在る。なお、住宅団地内に小学校、中学校は存在しない。また、当団地には7箇所の公園が存在しているが、当公園がその中で最大の面積である。

平原第二公園（1999.8.10 供用開始）は、都市近郊に在り、近くには工場地域が存在し、約20%の借家に若者が入居している安芸区平原団住宅団地に近年に造られた公園である。なお、住宅団地内に小学校、中学校は存在しない。小学校、中学校までは、約600 m 離れていて、国道2号線を横断しなければ行けない。また、近隣に公園は存在しない。

美鈴が丘緑第一公園（1988.7.1 供用開始）は、都市近郊の巨大住宅団地で、ほぼ全体が一戸建て・持ち家世帯で、親子2世代の同居が明確に示されている佐伯区美鈴が丘団地2期の美鈴が丘緑地区に在る。小学校、中学校、高等学校が、約400 m で住宅団地内に存在している。また、当団地には多数の公園が点在し、さらに地区公園が住宅団地の中心部に在る。

団地内の公園は、住宅団地完成後、広島市に移管された後、開設の告示により供用開始の手続き終了となるため、住宅団地完成と公園の供用開始

時期は異なっている。

⑵　周辺人口と利用者の割合

公園の利用率

誘致圏人口に対する利用者数の割合を利用率という。誘致圏人口とは、街区公園を中心に半径250m 以内の誘致圏内の人口を表す。誘致圏人口の算出は、まず、公園が配置された町丁目の人口を調査し、その人口を、誘致圏の人口に換算する。誘致圏内には平均して人口が分布していると仮定している。

表２に住宅団地内公園７箇所の利用者数と利用率を示す。

表２　住宅団地内公園の利用率

公園名	誘致圏人口	平日利用者数	休日利用者数	平日利用率（%）	休日利用率（%）
牛田早稲田第二公園	3,691	139	101	3.8	2.7
大和台第四公園	1,162	9	30	0.8	2.6
仁保第一公園	2,282	58	65	2.5	2.8
落合南第四公園	2,298	26	58	1.1	2.5
緑が丘北第一公園	3,382	75	63	2.2	1.9
平原第二公園	1,727	65	70	3.8	4.1
美鈴が丘緑第一公園	3,144	36	28	1.1	0.9
７公園の平均				2.3	2.3
市内31箇所平均				4.7	4.6
全国平均[3](2001.10調査)				6.1	5.8

利用率では、約１%しかない区分が４箇所に現れている。そして、住宅団地内７箇所の公園を平均した公園の利用者は、平日、休日ともに、誘致圏人口の2.3%にしかならない。その数値は、全国平均の平日利用に対して37.7%、休日利用には39.7%にしかならない。また、広島市平均の平日利用に対して48.9%、休日利用には50.0%にしかならない。

さらに、広島市の公園利用者数の平均は、大都市の公園利用者数の平均と比較すると平日で55.0%、休日で61.5%しかないという別の報告がされている[4]。

全国と、大都市の公園の利用率に比べ、広島市平均の公園の利用率が低いが、それよりも、団地内公園の利用率がさらに低いことが明確となった。

⑵　公園周辺住民の年齢構成と公園利用の関係

表３に住宅団地内７公園の周辺住民の年齢構成と公園利用の関係について示した。公園利用の年齢構成は、国土交通省が行う全国的な公園利用実態調査の分類に従い、学齢前、小学校低学年、小学校高学年、中学、高校、大人、高齢者（65歳以上）に区分し、平日と休日で利用の調査を行っている。

表３　住宅団地内公園７公園の年齢構成と利用者割合

	学齢前	小学（低）	小学（高）	中学	高校	大人	高齢者
住宅団地内公園周辺年齢構成（%）	4.8	2.9	3.3	4.2	4.8	68.7	11.2
平日利用者割合（%）	10.3	16.2	14.0	2.2	1.0	44.9	11.5
休日利用者割合（%）	17.8	24.6	8.4	3.4	1.2	37.8	6.7
平日利用者割合 / 周辺年齢構成	2.1	5.6	4.2	0.5	0.2	0.7	1.0
休日利用者割合 / 周辺年齢構成	3.7	8.5	2.6	0.8	0.3	0.6	0.6

年齢構成に比べて、学齢前、小学低学年、小学高学年の公園利用が著しい。また、平日の老齢者の公園利用は年齢構成とほぼ等しい。中学と、大人の公園利用は年齢構成に比べて極めて低い。高

３）平成13年度都市公園利用実態調査報告書　国土交通省公園緑地課　2002.3

４）平成13年度大都市都市公園機能実態共同調査報告書　日本公園緑地協会　2002.3

校はほとんど公園を利用していない。

次に、表４に、住宅団地内公園と広島市内公園と全国との、公園利用者の比較を行った。

表４　公園利用者の年齢構成の比較

地区	調査箇所	利用日	学齢前	小学(低)	小学(高)	中学	高校	大人	高齢者
広島市	7箇所の平均 住宅団地内公園	平日利用者割合(%)	10.3	16.2	14.0	2.2	1.0	44.9	11.5
		休日利用者割合(%)	17.8	24.6	8.4	3.4	1.2	37.8	6.7
	31箇所の平均 市内の公園	平日利用者割合(%)	15.0	13.6	6.6	0.9	1.9	48.8	13.2
		休日利用者割合(%)	19.1	16.4	6.5	2.6	2.2	39.6	13.5
全国	全国平均	平日利用者割合(%)	15.5	10.3	5.8	4.2		49.4	14.8
		休日利用者割合(%)	11.6	11.5	8.3	5.9		45.0	15.6

学齢前の公園利用では、団地内公園・広島市平均は休日利用が平日利用より大きいが、全国平均とは逆を示している。団地内公園での小学低学年の利用は、広島市平均、全国平均より大きい。小学高学年の平日の利用は団地内公園が一番大きい。中学・高校の団地内公園の平日利用は市内平均より大きいが、全国平均より小さい。高校の団地内公園の利用は、市内平均より小さい。大人の団地内公園の利用は休日利用の方が平日利用より小さく、全国平均と利用形態と似ている。高齢者の団地内公園の利用は休日より平日利用が大きく、市内平均・全国平均と逆転している。

次に、公園周辺住民と公園利用者の年齢構成の関連について、学齢前、小学校低学年、小学校高学年、中学、高校、大人、高齢者７分類と、平日と休日の14パターンについて、住宅団地内の７箇所の公園で検討を行った。その結果として、表５に世代別の人口割合と平日・休日の利用人口割合の相関係数を示す。

表５　世代別の人口割合と利用人口割合

	学齢前		小学(低)		小学(高)		中学	
	周辺人口	平日利用	周辺人口	平日利用	周辺人口	平日利用	周辺人口	平日利用
周辺人口割合	1.00		1.00		1.00		1.00	
平日利用人口割合	0.16	1.00	−0.48	1.00	0.48	1.00	0.61	1.00
休日利用人口割合	−0.09	0.84	−0.15	0.67	0.91	0.52	0.68	0.62

	高校		大人		高齢者	
	周辺人口	平日利用	周辺人口	平日利用	周辺人口	平日利用
周辺人口割合	1.00		1.00		1.00	
平日利用人口割合	0.58	1.00	−0.24	1.00	0.84	1.00
休日利用人口割合	−0.53	−0.45	−0.26	0.80	0.67	0.92

検討の結果、小学高学年において人口割合と休日の公園利用人口割合との相関係数は、0.91で強い関係があり、高齢者において人口割合と平日の公園利用人口割合との相関係数は、0.84で強い関係があることが判明した。また、平日と休日の公園利用については、学齢前、大人、高齢者において強い関係があることが示された。

年齢構成と公園利用の、その他の項目については、関係は弱いことが判明した。

(3)　住宅団地内公園の個別の検討

公園周辺の年齢構成と公園利用について、ほとんどの年齢層で、関係が見出されないため、その理由を調べるために、７箇所の公園の個別に検討を行った。

図１～図７に７箇所の住宅団地内公園の周辺の年齢構成割合と利用者年齢構成割合を示す。

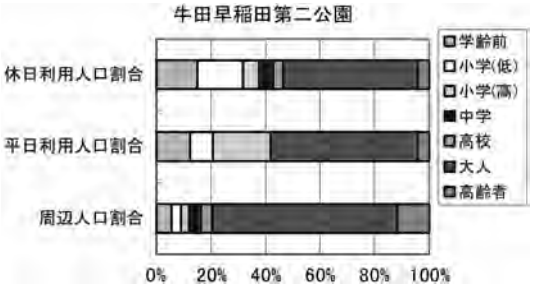

図１　牛田早稲田第二公園

牛田早稲田第二公園は、周辺に大規模マンションが多く在り、借家の割合が大きく、若い世帯が多いため、学齢前人口割合も高く、またその利用も非常に大きくて、小学生の利用も多い。

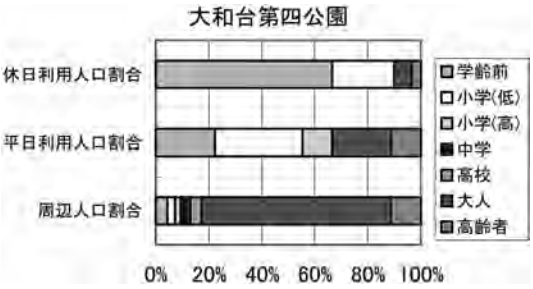

図２　大和台第四公園の利用年齢層

大和台第四公園は、学齢前の利用が非常に多い。そして、学齢前と小学生の利用で過半数を超えている。休日では学齢前だけの利用が多いため、異常な値を示している。大人の利用が少ないことは、児童への監視の目が行き届かないため、公園内の安全な利用の面で問題がある。当公園の平日の公園利用が７公園の中で一番低い数値である。

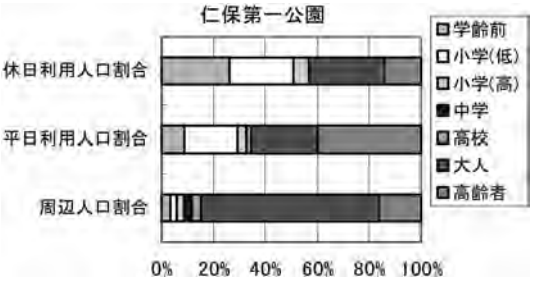

図３　仁保第一公園の利用年齢層

仁保第一公園は、平日利用に高齢者の利用が多いのはゲートボールを楽しんでいるためである。しかし、高齢者は休日には子供達に公園利用を譲り、休日には学齢前の利用が非常に多くなり、また小学低学年の利用も多い。

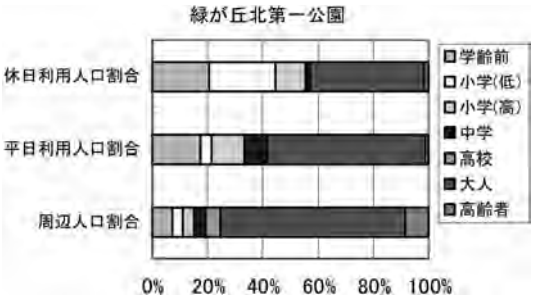

図４　緑が丘北第一公園の利用年齢層

緑が丘北第一公園は、県営アパート群の中に公園が在るため、年齢構成で学齢前が非常に高いことが、利用に影響を与えている。また、小学校に隣接しているため、小学生の利用も多い。高齢者の利用は殆ど無い。当公園では家族連れでの利用が非常に多い。

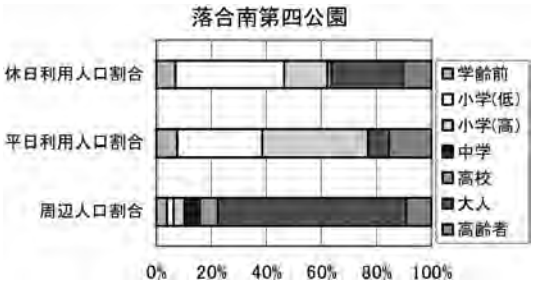

図５　落合南第四公園の利用年齢層

落合第四公園は、小学生の利用が大半を占めていて、特に平日の小学生の利用が顕著である。公園が住宅団地入口付近に設置され、公園の広さも法の基準をほぼ確保されていて、学童の遊び場所として利用が非常に多い。

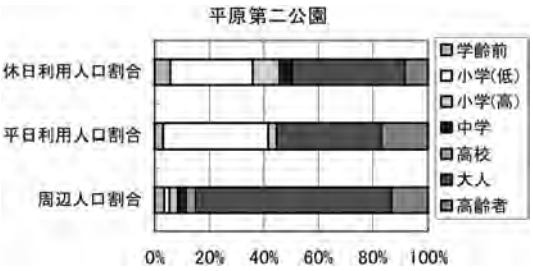

図６　平原第二公園の利用年齢層

平原第二公園は、1999年開設の新しい公園で、子供たちの興味を引き付けるニュータイプの遊具が存在することと、道路幅員が狭い古い住宅団地で、他に遊び場所が無いことが、学童の利用に結びついている。

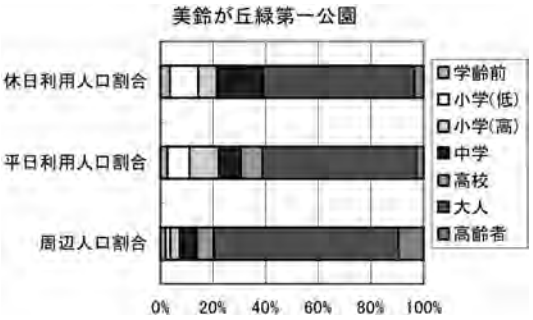

図７　美鈴が丘第一公園

美鈴が丘第一公園は、平日の高校世代の利用が現れているが、近くに高校があるため、登下校時の利用が現れている。また、他の公園に比べ中学の利用も多い。

７箇所の住宅団地内公園の平日と休日の利用を検討した結果、次のような特色のある利用形態があることが判明した。それらを分類して、以下のようにグループ名を付けた。なお、特色ある利用形態とは、年齢構成割合の２倍以上の利用割合があることと、かつ10%以上の利用者割合があることを目途とした。

①　ゲートボールや清掃等で公園を利用する高齢者の利用割合が大きい「高齢者占用型」（仁保第一公園の平日）

②　親と学齢前の幼児が利用し、学齢前の公園利用割合が大きい「公園デビュー型」（大和台第四公園）、（緑が丘北第一公園）

③　学校の帰りや、自由時間に、学童の公園利用の割合が大きい「寄り道型」（落合第四公園は小学生寄り道型で、平原第二公園は小学低学年寄り道型である。またその変形として、高校生の寄り道型としての美鈴が丘第一公園の平日利用がある）

これらは、公園をグループとして利用する、清掃、スポーツ、遊戯、保育園等の園外活動、ラジオ体操、会話・団らん、学齢前の子供を持つ母親同士の交流等があり、公園周辺住民の各世代におけるコミュニティの形成と活動の状況が、公園利用に現れ、公園毎の利用の特色を出している。

また、公園を個人として利用する、犬の散歩、トイレの使用、休憩等があるが、住宅団地内公園では、その利用が公園周辺の人達に限定されていることと、その数は大人の利用に含まれるため、数値に影響を与えていない。

２．住宅団地内の公園利用者数の検討

住宅団地の場合、公園利用が少ないことは、昼間人口が夜間人口に比べて低いことが影響していると考えられる。

⑴　昼間人口の検討

そこで、住宅団地の昼間人口について検討を行う。一般に、昼間人口＝夜間人口－（就業流出＋就学流出）＋（就業流入＋就学流入）として表わされる。この場合、学齢前の保育園・幼稚園の通園は流出として考慮しないし、義務教育期間の学童の区域外私学への就学流出も考慮しない。

また、取り扱っている住宅団地内公園の誘致圏には高校以上の学校は無いため、就学流入も無い。

就業流出と就学流出は2000年の国勢調査の数値を用いた。就業流入は、事業所統計[5] より町丁目別の民営・公共団体の事業所の従業員数から国勢調査の自宅での就業者数を差し引いた値とした。

表６に住宅団地内公園の誘致圏における昼夜間人口の一覧表を示す。

５）広島市「平成13年事業所・企業統計調査結果報告書」2003.3

住宅団地内公園の平均で、平日の公園利用者の割合が、夜間人口では2.3%であったものが、昼間人口で計算すると4.8%に増加した。しかし、その数値は、広島市の平均4.7%を超えているが、全国平均の6.1%には及ばない。

昼夜間人口比を考慮すると、休日の公園利用は、平日の2倍の値を示さなければならない。さらに、表2で示されるように、7公園中3公園は平日利用者が休日利用者より多い。これらの検討により、団地内公園の利用者が少ないことの理由に「昼夜間人口」は該当しない。

表6　住宅団地内公園の誘致圏の昼夜間人口

	夜間人口（人）	昼間人口（人）	昼間/夜間（%）
牛田早稲田第二公園	3,688	1,707	46.3
大和台第四公園	1,550	788	50.8
仁保第一公園	2,282	1,353	59.3
緑が丘第一公園	3,373	1,552	46.0
落合南第四公園	3,281	950	29.0
平原第二公園	1,727	829	48.0
美鈴が丘緑第一公園	5,903	1,347	22.8

⑵　団地内公園の利用の少ない原因への考察

以上の資料の検討により、住宅団地内公園の利用の少ないことが明確となったため、改めてその原因について、団地内7公園を実地検証した結果、公園の実態面について、以下のことが言える。

公園の配置、規模の面から

- 公園の位置が住宅団地の周辺部の不便な場所にある。
- 公園の面積が小さい。（7公園全てが基準以下の面積である）
- スポーツができる広場がない。
- 近くに同じような公園か、もっと大きな公園が在る。（7公園中6公園に競合する公園が在る）

公園の設備の面から

- 遊具が古い、又は不備である。（新しいタイプの遊具施設が在るのは7公園中1公園）
- トイレが無い。（7公園中4公園にトイレが無い）
- 休息場所としてベンチ等が古いか不備である。

公園の集客の面では

- 公園に児童館、地区会館等の集客施設がない。（7公園全て）
- 花壇等の地元住民が参加して管理できる施設が無い。
- 家族の遊ぶ場所として不適当である。
- 使用に規制が多い。（ボール遊び等の禁止）

団地の人口構成として

- 誘致圏が団地外の住民が居ない場所をカバーしている住宅団地では、誘致圏人口が過大な数値となっている。

次に、参考資料として全国での街区公園の利用方法と要望を示す。2001年に国土交通省が、都市公園の利用実態調査の中で行った全国的なアンケート[6]の結果を、表7と表8に示す。なお、項目の数値は重複回答のため、合計は100%を上回る。

全国的なアンケートによる、公園で行いたい事項について、高校以下の全ての年齢層では「運動・スポーツをしたい」、高校以上の全ての年齢層で「散歩を楽しみたい」、中学以上の全ての年齢層で「のんびりとくつろぎたい」、子どもを持つ親の世代では「子どもを遊ばせたい」が大きなウェートを占めている。

公園を利用する目的として、運動、遊び、散歩、休息が、大きな項目として上げられていることは、従来からの、一般的な公園での利用方法が再確認されたこととなる。

公園に希望する施設としては、花壇、噴水を含めた池や小川などの水の施設、広場、遊具の項目が高い要望を受けている。

全国的な規模での要望を取りまとめたが、これらは、総論的な要望であり、個々の公園については、周辺住民の要望を汲み取り、行政と住民が話し合いながら、公園再生計画を作り上げて、住民の協力のもとに再生を実施する手法をとる必要がある。

広島市ではその手法の一つであるワークショップ方式を用いて公園再生に着手したところである[7]。

6）平成13年度都市公園利用実態調査報告書　国土交通省公園緑地課　2002.3

7）広島市「身近な公園再生構想―地域に愛され育まれる公園に向けて」2004.3

表７　年齢層と行いたい活動（街区公園）

	小学(低)	小学(高)	中学	高校等	19–20歳	30–39歳	40–64歳	65歳＋
散歩を楽しみたい	21.1	12.5	24.1	31.8	42.1	36.9	51.0	52.3
運動・スポーツをしたい	42.1	66.7	65.6	31.8	29.4	20.1	13.3	15.3
スポーツを観戦したい	2.6	15.3	13.8	9.1	5.6	4.4	4.1	2.3
のんびりくつろぎたい	18.4	15.3	37.9	36.4	42.9	35.7	38.6	40.3
緑や花を観賞したい	13.2	6.9	3.4	0.0	8.7	11.6	22.0	19.3
良い景色や雰囲気を楽しみたい	10.5	6.9	10.3	4.5	7.9	10.8	16.2	10.2
良い景色や雰囲気で食事を楽しむ	7.9	0.0	6.9	13.6	12.7	11.6	8.3	5.1
会話を楽しみたい	2.6	4.2	13.8	27.3	8.7	7.6	2.9	9.7
子供を遊ばせたい	7.9	8.3	3.4	13.6	37.3	57.4	24.5	10.2
自然観察などをしたい	13.2	12.5	3.4	9.1	4.0	10.4	9.5	2.3
催物を楽しみたい・参加したい	0.0	2.8	0.0	9.1	0.9	3.2	4.6	3.4
趣味等の自主的活動をしたい	2.6	4.2	6.9	13.6	4.0	2.0	2.1	4.0
講習・教室等に参加したい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	1.6	0.8	1.1
その他	13.2	2.8	0.0	4.5	0.8	0.4	0.8	2.3
特にしたいことはない	13.2	9.7	13.8	9.1	7.1	5.2	7.1	9.7
無回答	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1	3.4

欄内の網掛けは、ベスト３を記した。

しかしながら、団地内公園は団地内で公園が近接しているため改良すべき公園の選別が困難であること、公園面積が小さいこと、公園利用がごく限られた範囲の周辺住民に限定されること、公園再生の要望が低いこと、さらには、広島市の財政危機のために、公園再生の手法が住宅団地内公園に及んでいない。

表８　年齢層と希望する施設（街区公園）

	小学(低)	小学(高)	中学	高校等	19–20歳	30–39歳	40–64歳	65歳＋
花壇	15.8	8.3	6.9	40.9	21.4	24.9	34.0	31.3
昆虫や動植物などが観察できる池や川	5.3	11.1	10.3	18.2	7.1	13.7	10.4	2.3
植物園	2.6	2.8	6.9	4.5	7.9	5.8	6.2	5.1
噴水	10.5	23.6	17.2	27.3	22.2	26.9	24.5	15.3
子供用の遊具	13.2	20.8	6.9	9.1	11.9	20.5	13.7	4.5
ボートのある池	13.2	11.1	3.4	13.6	3.2	2.4	1.2	2.3
自然探勝路	0.0	4.2	3.4	18.2	4.0	5.2	7.1	0.6
広場	26.3	12.5	10.3	13.6	17.5	15.3	15.4	10.8
冒険遊び場	7.9	12.5	10.3	13.6	10.3	6.0	5.0	0.6
森	7.9	5.6	0.0	13.6	7.1	5.2	4.5	2.3
野鳥園	0.0	4.2	3.4	4.5	1.6	2.8	1.2	2.3
図書館・博物館	0.0	1.4	10.3	0.0	2.4	2.0	2.9	1.1
フィールドアスレチック	5.3	15.3	6.9	0.0	3.2	4.0	4.1	1.7
レストラン	0.0	1.4	6.9	0.0	0.8	0.4	0.8	0.0
キャンプ場	0.0	2.8	0.0	0.0	0.8	0.4	0.4	0.0
室内プール	0.0	2.8	0.0	0.0	1.6	0.8	0.8	0.0
サイクリングコース	5.3	0.0	0.0	0.0	0.8	0.8	0.4	0.0
ファミリー農園	0.0	0.0	3.4	4.5	6.3	1.2	0.8	0.6
釣堀	5.3	1.4	3.4	4.5	1.6	0.8	0.4	0.6
ジェットコースターなどの乗り物	10.5	11.1	3.4	9.1	1.6	1.6	0.4	0.0

３．ま と め

住宅団地の中に在る７箇所の街区公園周辺の年齢構成と公園の利用の関係について検証を行った。

住宅団地内の街区公園利用者数は、市内街区公園利用者数と全国街区公園利用者数より非常に少ないことが判明した。

住宅団地内の街区公園において、小学高学年の休日利用と老齢者の平日利用に、年齢構成割合と利用者割合に強い関係が現れたが、他の年齢構成割合と公園利用者割合との関係が弱いことが分

かった。

その理由としては、抽出された公園が周辺コミュニティの独自の活動で特色ある利用形態を表しているためである。

平日の利用について、昼夜人口の差による影響を検証した結果、団地内公園の利用と昼夜間人口とは無関係であることが分かった。

住宅団地の公園利用の形態について、実証的に検証した結果、特色の在る利用形態として、「高齢者占用型」、「公園デビュー型」、「寄り道型」の3パターンを示すことができた。

さらに、住宅団地内の公園の利用者が少ないことに対して、7箇所の公園を実地検証した結果を踏まえて、考察をおこなった。

4．今後の検討

公園利用実態調査と公園の実態から、公園利用の少ないことへの考察を行ったが、今後は、利用者のアンケート調査を行い、利用者の立場から、なぜ公園利用が少ないかを探る必要がある。

また、住宅団地内公園の周辺住民の年齢構成の経年変化と、その経年変化に対する公園利用の変化を調査するためには、公園利用実態調査の経年の調査が、是非とも必要である。

参考資料

五十嵐芳樹（1987）「児童公園の利用特性と評価に関する研究」北海道大学学位論文
石川幹子（2001）『都市と公園　新しい都市環境の創造に向けて』 岩波書店
大屋霊城（1930）「計画・設計・施工　公園及運動場」裳華房
佐藤昌（1977）『日本公園緑地発達史　上巻』都市計画研究所
白幡洋三郎（1995）『近代都市公園史の研究―欧化の系譜―』 思文閣出版
申　龍徹（2004）『都市公園政策形成史』法政大学出版局
都市整備局日本公園緑地協会（2004）『公園緑地マュアル平成16年度版』
ハワード（長素連訳）（1968）『明日の田園都市』鹿島出版会
蓑茂寿太郎（1988）「都市公園の配置に関する計画学的研究」東京農業大学学位論文
『2000年国政調査資料』 総務省統計局
『数値地図2500』 国土地理院
『15年度広島市公園開設調書』 広島市都市計画局
『公園・緑地・広告必携　平成7年度版・10年度版・14年度版』 ぎょうせい
『15年度広島市開発状況調書』 広島市
なお、脚注に記載の参考文献は省略している。

Empirical Analyses on Utilization Pattern of Square Parks in Housing Development Areas in Hiroshima City

: Focusing to the age constitution of inhabitants around urban parks

Kouji SIODE
Graduate School of Social Sciences, Hiroshima University

Abstract

Each square park has an individual utilization pattern, which is supposed to be determined by its age constitution of inhabitants there. The aim of this paper is to examine the relationship between inhabitants' age constitution and utilization pattern of square parks in housing development areas in Hiroshima City.

The following things are clarified through several empirical analyses,

(1) The relationship between them above is not so strong,

(2) The utilization pattern is greatly determined by community-based activities by aged people,

(3) The utilization level of square parks in housing development areas in Hiroshima city is rather low, comparing with other areas.